

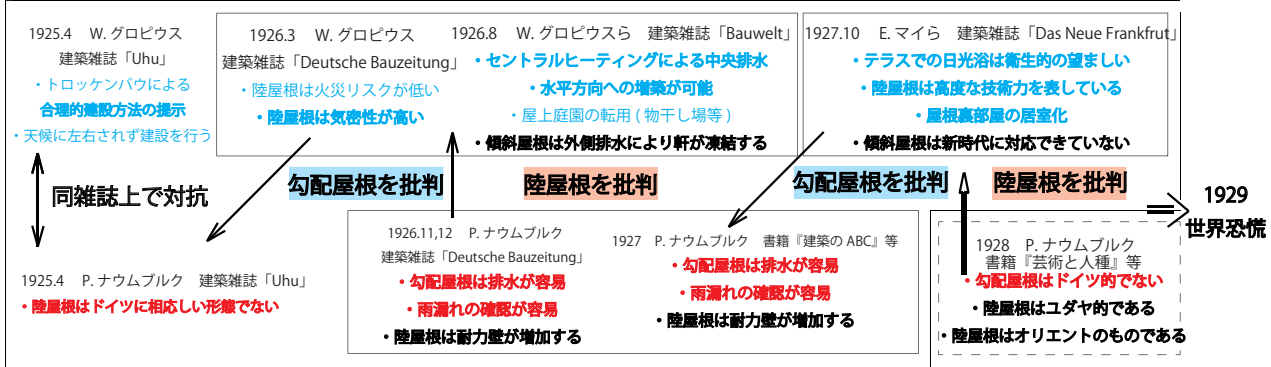
ドイツ人建築家ポール・シュルツェ＝ナウムブルクの建築思想について -ヴァイマル期(1919-1933)の「屋根論争」におけるモダニズム建築批判を中心に-

内田研究室 竹本 真

研究概要・目的:本研究は、近代ドイツで、当時最も影響力を持っていた「ナショナリスト」とされる、ドイツ人建築家ポール・シュルツェ＝ナウムブルク(Paul Schultze=Naumburg;1869-1949)に注目し、これまで着目されてこなかったナショナリズムの観点よりモダニズム建築の考察を行った。特に、近代ドイツの重要な形態論争である、陸屋根の使用の是非が問われた「屋根論争」での論考に着目し、ナウムブルクの建築思想の分析と、「屋根論争」への関与を通じてモダニズム建築の形成過程への影響関係を明らかにすることを目的とする。近代ドイツのモダニズム建築の再考より、近代ドイツ建築及びナウムブルクについて新たな視座をもたらすことを目指した。

研究成果:

近代ドイツ史	帝政ドイツ 1871-1918			ワイマール共和国 1918-1933		ナチス・ドイツ 1933-1945	
	1870	1880	1890	1910	1920	1930	1940
	・普仏戦争(1871) ・独・露同盟(1879) ・独・仏・露同盟(1881)			第一次世界大戦(1914-1918)		世界恐慌(1929)	
	・ドイツ景観重要地域における景観悪化防止法(1907) ・ロシア革命(1917)					第二次世界大戦(1939-1945)	
主な出版物のその主張	①形態 書籍: 36 雑誌記事: 142 合計: 178						
	②技術 ・1901『文化研究(1)家の建設』…切妻屋根は形態的にドイツに相応しい ・1927『建築のABC』…陸屋根は降水の多いドイツでは相応しくない ・1904『文化研究(4)町の建設』…陸屋根はイタリアのもの ・1925『ブルジョワの家』…「陸屋根」は地中海(ギリシャ)の形態である ・1928『芸術と人種』…建築は人種によって決定される ・1929『ドイツ人の家の顔』…ヴァイセンホーフは東洋のもの						
	③マスメディア ・1901『文化研究(1)家の建設』…切妻屋根は排水性よりドイツに相応しい ・1924『住宅の建設』…建築は文化的価値観に基づいて建設される ・1904『文化研究(4)町の建設』…ビルダーの技術を優先 ・1925『Uhu』「勾配屋根」…RC造は高価、寒冷のドイツでは相応しくない ・1927『陸屋根または傾斜した家?』…勾配屋根は排水が容易、低コスト						
	④建築組織 ・1901『ザレッカー・ワーカーショップ』創設 → 1927解散 ・1904ドイツ郷土保護連盟 → 1913会長辞職 ・1907『ドイツ工作連盟』設立人の一人 → 1927連盟脱退 → 1928『Der Block』会長就任 → 1929ドイツ文化のための戦闘リーグ参加 → 1930ナチス入党						
	⑤建築作品 1904 グレル博士の家 ④ 1911 メルゼブルクの住宅 ⑤ 1912-1927 ボツダムのツェリエンホーフ宮殿 ⑥ 1926 ダムスヘーエのゲストハウス ⑦						



苦勞した点や感想など:コロナ禍の影響で、ドイツでの資料収集や実際の建築物を見に行くことができなかつた点が心残りであり、本研究に不足している点と感じています。本研究で得られた知見に満足することなく、本研究での知見を手がかりに研究を進めていきたいと思ひます。

指導教授である内田青蔵先生、内田研究室特別助教授である須崎文代先生、本学建築学科の先生方に心より感謝申し上げます。